

# ソーシャルキャピタルのジェンダーギャップの克服と地域防災力の向上

私達が解決したい課題

「高齢男性が地域コミュニティに  
溶け込めず孤立してしまう状態」

私達の考えるおじさん活用術



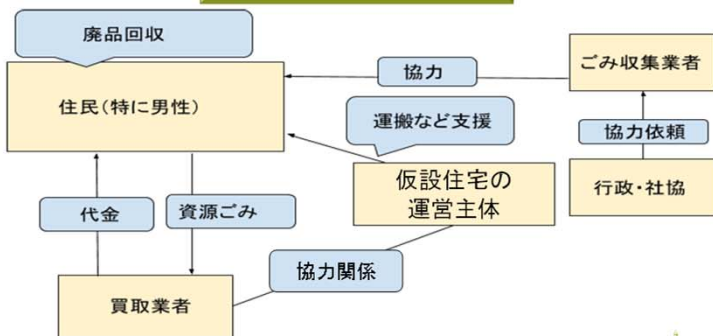
一言でいうと！

「地域住民みんなで定期的に廃品回収をしよう！」  
@益城テクノ仮設団地」

Point

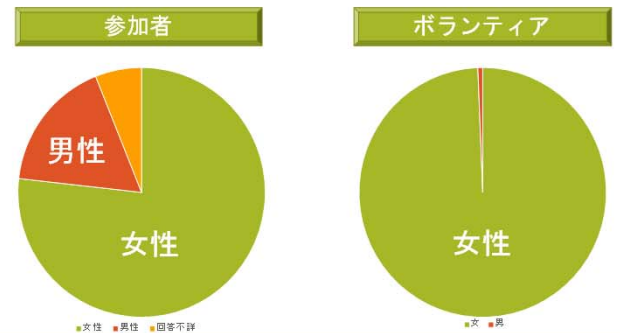
- ①高齢者男性と地域とのつながりづくり
- ②収益は地域へ還元し、さらにコミュニティ活性化
- ③高い参加率と継続性が見込める

## 政策の仕組み図



## 課題の発見①

～ふれあいサロン調査から気付いた男女差～



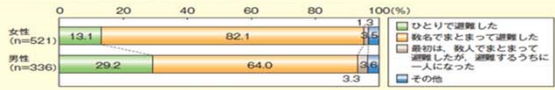
## 課題の発見②

～震災時のデータから読み取るソーシャルキャピタルの男女差～

東日本大震災死者構成対人口構成比(倍)

	9歳以下	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
男性	0.4	0.3	0.4	0.4	0.5	0.9	1.4	2.3	3.3
女性	0.4	0.3	0.3	0.4	0.6	0.9	1.3	2.0	3.0

第1～15回 避難するとき一緒に行動した人(男女別)



(備考) 1. 内閣府・消防庁・気象庁共同調査「震災避難に関する調査」(平成23年)を基に、内閣府男女別避難調査による男女別集計。  
2. 調査対象は、自主避難先(益城町)を伊勢湾沿岸圏(伊勢湾)で避難している被災者270人(女性225人、男性36人)。調査は、仮設住宅・避難所を訪問し、面接方式で実施。  
3. 調査時期は、平成27年7月1日から7月31日。  
4. 本図の図表は、避難時の避難行動で、「誰れがおきまった直後にすぐ避難した」「なんらかの行動を終えて避難した」「なんらかの行動をしている途中で避難が迫ってきたら必ず自ら避難した人」である。  
5. 「その他」には、「覚えていない」「その他」の回答者が含まれている。

## 災害後にはソーシャル・キャピタルの男女差が顕著に表れる

東日本大震災では...

【孤独死数】

男性142名 女性55名

一男性の孤独死は女性の  
2.6倍となっており、男性の方が圧倒的に多い

※手宮城、福島3県の被災者が入居するプ  
ラザ(仮設住宅と災害公営住宅を対象とした調

熊本地震では...

団地の集会所に集う女性たちの姿  
「夫が外に出たがらず、1日中家にいる」  
「夫を外に連れ出そうとするがなかなかうまくいかない」等の声が聞かれた



## 黒髪4町内自主防災クラブへの取材



## まとめ

- ・退職後の男性は、一気にネットワークが狭まってしまい地域のコミュニティに溶け込めない現状
- ・結果として災害時には男性の方がソーシャルキャピタルの効用を受けづらくなっている
- ・男女差なく地域コミュニティを築いていく必要がある
- ・地域のつながりが特に薄い仮設住宅で廃品回収を行うことで、男性に義務感を持たせて家から出てきてもらう
- ・収益は地域へ還元し、地域コミュニティの強化につながる